

現代の世界文学——集英社

サヴィルの青春

Saville

David Storey

デイヴィッド・ストーリー

橋口 稔一訳

親

貧しい炭坑夫の
子にだって、
人生を選ぶ権利くらい、
あるはずだ! 自由を求めて
さまようサヴィル少年の
若い魂の叫びが聞こえる!!

離

下層階級に生きる父と、
そこから
飛び出したい息子の
心の亀裂に踏み入って、
親子関係や学校問題について
鋭く問いつける。

子

第二次大戦勃発で
揺れ動く
世相を背景に、
苦悩に満ちた自己の青春時代を
物語として再現した
ストーリーの自伝的長篇。

離

'76年度ブッカー賞
を受賞して
話題を呼んだ大作。



現代の世界文学——集英社

サヴィルの青春

Saville
David Storey

デイヴィッド・ストーリー

橋口 稔一 訳



現代の世界文学

サヴィルの青春

定価二、〇〇〇円

一九八三年七月二五日第一刷印刷

一九八三年八月二〇日第一刷発行

著者——デイヴィッド・ストーリー

訳者——橋口稔

装幀者——杉浦康平・赤崎正一

発行者——堀内末男

印刷所——大日本印刷株式会社

発行所——株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五〇一〇

郵便番号一〇一

電話(233)二八四二番(出版部)

(230)六一七一番(販売部)

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

SAVILLE

by David Storey

Copyright © 1976 by David Storey

Japanese translation rights arranged

through A. M. Heath & Co., Ltd., London

and Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

© 1983 Shueisha, Printed in Japan

ISBN4-08-124090-6 C0397

目次

第一部 (1) 5

第二部 (6) 11

第三部 (12) 16

第四部 (17) 24

第五部 (25) 31

訳者あとがき

439

348

215

122

48

5

サ
ヴ
イ
ル
の
青
春

第一部

1

今世紀の二〇年代の終り頃、南ヨークシャーの低い丘陵地帯にある小さな炭坑村サクストンの狭い通りに、一台の炭坑用の荷車が暗灰色の大きな馬に牽かれてやってきた。

馭者の隣には、髪の高い女が坐っている。不機嫌そうな顔に暗褐色の眼をした女で、赤っぽい大きなコートに身体ぜんたいを包んで、足首から下しか見えない。小さな、びったり合う帽子が貝殻のように頭を包んでいて、その下から束ねた髪がカールして突き出ていた。一歳になるかならずぬ子供を、灰色の毛布にくるんで膝の上に抱いている。薄青い眼に金髪の子で、荷馬車が村の中心をはずれて、家並が畠に変わると、眼の前の馬の動きに奪われていた視線を畠に移して、盲人のような眼でじっとみつめていた。

荷車には、家財道具が無数に積み上げられていた。無数と言っても、本来引越荷物を運ぶようには作られていない炭坑用の荷車にしては、たくさんものが積まれているというところでしかない。四角い木のテーブルと四脚の木の椅

子があった。二脚の布張りの椅子はこわれかけている。木製の頭板のダブル・ベッドがある。いろんな容器や鍋や箱がある。戸棚と簞笥がある。茶色に塗った背の高い衣裳簞笥がある。そのドアには鏡が付いていた。

積荷の上に、薄青い眼をした金髪の小柄な男が、危っかしい恰好で乗っていた。だらしない上衣のボタンをはずして、襟のないワイシャツが見えた。馭者席の女とちがつて、いかにも愉しそうに周囲を見まわしている。野原に通じる坂道に小さな家々が並ぶ街角までくると、積荷の上の男が馭者に声をかけた。馭者は舌を鳴らして、馬の向きを変え、男の指図するとおりに、石造りの小さな家の前に停めた。五軒長屋の真中の家だった。一階にはドアと窓が一つずつある。二階には窓が二つある。屋根には大きなスレートが不揃いに並んでいた。

金髪の男は荷車から飛び降りた。小さな門を開け、幅が六フィートとない前庭を横切って行って、上衣のポケットから鍵を取り出し、褐色のドアを開けて中に姿を消した。じきにまた姿を現わして、荷車のほうに合図をした。ちょっとためらった後、女は子供を道に降ろした。ところが、

降り立つたと思うと、子供はおぼつかない足取りで、門の中の方ではなく、逆に今きた道を戻り始めた。

「こら、アンドルー」と男は叫んだ。女に手を貸して降ろしてから、子供を追いかけた。両手に抱きかかえて、笑いながら言った。「おまえはどこへ行こうってんだい？」子供が一徹なのを喜んでゐる。子供に家を見せながら言った。「家に帰ろうっていうのか？ 今日からはここがおまえの家なんだぞ。ここがおまえの住む小屋だぞ」不安そうに門のところに立っている女に声をかけた。「さあ、エレン、この子を連れて入れ」

家具が降ろされた。馭者と金髪の男が家の中に運びこんだ。組み立てられたベッドは、二階の正面の小さな部屋に置かれた。木の箱にマットレスを入れただけのベビー・ベツドを脇に置いた。さらに衣裳簞笥を入れると、その部屋はほとんど足の踏場もなかった。簞笥は家の後ろ側に二つある部屋の一つに押しこんだ。そこは戸棚くらしいの幅しかない部屋だった。もう一つは四角い部屋で、細い窓から長屋共通の裏庭を見下ろせた。裏庭の向うに、それぞれの家が使う庭園がある。そのまた向うは、柵で囲まれた野原になつており、反対側にはべつの長屋がある。

あとの家具は、一階の正面の部屋と台所に置かれた。

「さあ、ひとつ祝杯を挙げよう」と金髪の男は、仕事が一段落着くと言った。あちこち箱の中を掻きまわした挙句、やっとコップを三つ取り出した。買物袋からビール瓶を取

り出す。栓を引つけて抜く場所を探して、結局、台所の隅の蛇口が一つあるだけの四角い流しの角で栓を抜いた。流しと並んで、炉棚風の高いレンジと一組の戸棚が備え付けられていた。

「わたしはいらないわ」と女は言った。まだ子供を抱いたまま、部屋の中を見まわしている。「ビールなんて呑めないわ」

「こういう仕事の後は、これに限るんだ」と言つて、金髪の男は構わずに自分のコップを呑みほした。

「どれ、乾杯だ、ミスター・サヴィル」と馭者が言った。

「新しい家ができてお芽出とう」黒い髪の女のほうにコップを突き出した。女はまだ、コートも帽子も脱がないでゐる。「これからはあんまり面倒なことがないように乾杯」と馭者が言った。

女は眼を逸らした。金髪の男は笑っていた。

「そうだ、乾杯だ」自分のコップにまたビールをつぎ、残りを馭者に差し出した。

やがて馭者が帰つて行き、玄關のドアが閉められた。サヴィル夫婦は、小さな部屋の家具を片付け始めた。火をおこし、お茶を淹れた。殺風景な台所を眺めて坐っていた。前に借りていた人が付けた染みが残っており、臭いが漂っていた。裏庭に通じるドアは細工のところに孔があいていた。床板にも孔があつて、紙屑やごみが見えた。半信半疑のサヴィルは、膝をついて覗いてみた。

「信じられるかい？　こんなところに茶殻を捨ててたらし
う」

子供は階段を昇って行ったらしく、二階の床を歩く音がした。

「気を付けてやってよ」と母親が言った。「階段に慣れてないんだから」前の家はアパートの一室だった。自分たちだけの家に住むのは、これが初めてである。

「階段に柵をつくろう」と父親は言った。階段のところへ行つて、嬉しそうに二階を眺めている。「うん、こいつは妻い家だ。じきにきれいな家になる」女房が憂鬱そうな顔をしているのを、台所のドア越しに見てとつて、笑いながら歩み寄ると抱こうとした。

「いや」と言つて、女は坐っている椅子にしがみついた。眼は虚ろに火をみつめている。「お湯が出ないから沸かさなきゃならないし、便所も裏庭だし」

「共同便所のところだつてあるんだから、これでもましなんだぜ」

「そうね。そう考えることにしましょう」と立ち上つて言った。「さあ、片付けましょう」

「明日にしたつていいじゃないか」

「いやよ。このままじゃ眠れないわ。こんな汚いままじゃ、料理も食事もできないわ」

そこで、サヴィル夫婦は、その日のうちに掃除をするこ
とになった。夜遅くまでかかった。両側の家が真暗になつ

てからずつと後まで、ガス・ランプの灯りが裏庭を照して
いた。子供は、掃いたり拭いたり音にお構いなしに、二
階のベッドで眠っていた。明方になって、男は二時間ほど
眠った。夜が明けると、起きて仕事に出かけて行つた。

「午後に帰るから」と裏のドアのところで言った。「残し
てきたものを自転車で運んでくる」まだ火の燃えている台
所をちよつと見て、それから裏庭を横切つて行つた。妻は
じつと見送つていた。ドアのところで、別れ際に頬にキス
してやりたかつたができなかった。朝の薄明りが、野原と
その向うの家並にひろがつていた。新しい家に置き去りに
される寂しさに襲われて、夫の名を呼んだ。夫は人影のな
い裏庭のはずれで振り向いて、陽気に手を振つた。彼にと
つては毎日繰返される別れの一つでしかないみたいだつ
た。手を振りつづけながら、外の道に姿を消した。

女はしばらく立ち竦んでいた。ドアを閉め、火のまだ燃
えている台所を見まわした。テーブルと椅子と戸棚と、流
しに積み上げられた器があるだけで、彼女の気持を鎮めて
くれるものは何もなかった。彼女は暖炉の前に泣きくずれ
た。

ふたりは、サクストンに引越してくる一年半ほど前に結
婚したのだった。越してくる前は、別の夫婦とアパートの
一室を共同で借りていた。近くのサクストン村の農夫の家
が空いて、借りることができた。前に住んでいたのは鰥夫、

の年寄で、飼っていた犬と猫の臭いに、サヴィル夫婦は越してきてから数日間悩まされた。老人が床下に捨てたごみもくさかった。

あらかじめ掃除する暇なしに越してきたので、何日もかかって床を拭き、壁や板を洗い、犬がドアや漆喰に開けた孔をふさいだ。天井も直したし、床板も腐っているのは取り換えた。ようやく、壁も塗りかえ、外の板壁にもペンキを塗った。六マイルも離れたところにある炭坑での朝番から帰って、一眠りした夕方に、サヴィルは低い柵で囲まれた庭の生い茂った雑草を掘り返した。

夕方は、子供を連れて裏庭のベンチに坐って過すようになった。不揃いの木片で作ったベンチだった。子供を膝に乗せて、パイプをくゆらせる。子供はパイプの煙をつかもうとした。サヴィルは笑いながら、煙を吹きとばした。

.....

やがて主婦の家事は日課になった。月曜日には洗濯をする。火曜日には完全に乾燥させ、アイロン掛けを始める。水曜日には買物をして、アイロン掛けを終える。暇があればパンを焼いた。小さなオーヴン棚一つを占める大きなデイー・ケーキ型のパンと、もつと小さい長方形のパンだった。煉粉を、火の前の大きな陶器のボールの中でこねる。子供は椅子に坐ったり床に坐ったりして見ていた。自分で

もこねたくて仕方ない。母親が罐の中で形をつくったり、油を塗った黒いオーヴン・プレートの上で形を整えたりするのを見守っている。ときどき端があらまると、自分でもこねさせてもらって、パラフィン紙の上にのせていた。初めはそれを炎の燃えている炉棚で焼いていたが、そのうち、オーヴンに滑りこませて焼けるのを待ちかねるようになった。母親は小さなクロムの換気装置を調節して、火を強くする。背の高い暖炉の上の時計を見ながら、手に麻布を持って、ドアにもたれて待つ。パンが焼けると、子供のを真先に取り出して、「そら、出来栄えはどう？」と口先だけで訊く。心は自分で焼いたパンの焼け具合に向いている。

この息子には年に似合わない機敏なところがあった。ちっぽけな手をしていながら、いやに器用だった。手伝ってやると、驚くほど上手にパンをつくるようになった。混ぜ合せて、パン種を入れ、形を整え、もう一度こねて、プレートか罐にのせてオーヴンに入れる——それぞれの段階をこなすようになった。「こいつはパン屋になつたらいい」とサヴィルは、家に帰ってきて、子供が焼いた小さなパンを見て言った。子供にせがまれて、一つ千切ってジャムを付け、一生懸命みつめる子供の前で、見るからに嬉しそうにゆっくり噛んで食べた。「いやあ、この家にはまたきたいなあ。腹の空いた客を満足させてくれるよ」

木曜日には二階の掃除をした。まず正面の寢室をきれいにする。台所を別にすれば、床にリノリウムが敷いてあ

るのはこの部屋だけだった。よく洗って磨いた。それから、後ろの二部屋を片付け、最後に階段を拭いた。金曜日には台所の床を洗って掃除し、表の小さな部屋を掃いて拭いた。黒いエナメルを塗った空っぽの燐火の前に、安楽椅子が二脚置いてある。台所のガス・レンジの黒いエナメルを磨くのと同じように、燐火のエナメルも磨いた。金曜日の夕方には、家中がびかびかして、その表面にガスの灯りが輝いた。サヴィルは火の前で子供に湯をつかわせた。炉棚の前に紙を敷き、金属製の桶を置いた。アンドルーは両手をばたばたさせて叫び声を挙げる。燃えている石炭に水がはねて音を立てた。磨いたばかりの床を汚されたくなくて、妻が声をかける。サヴィルは桶に膝をつけて、歌を歌いながら笑っている。子供はびっくりした顔で父親をみつめている。父親は顔を真緒にして、炉の火に歯を輝かせながら、いつまでも気持よさそうに歌っている。子供の薄青い眼は、釘付にされたまま輝いていた。

「おい、この小さな足を見てもろよ、エレン」とサヴィルは、子供を桶の中に立たせて言った。アンドルーのやわらかい肉のよりあがりやを撫でている。撫でる手はごつごつと節くれだって、石炭の染みが皮膚の下にまでこびりついている。子供の滑らかな桃色の肌とはあまりに不釣り合いだった。まだ濡れたままの子供を高く持ち上げる。子供は手足をぶらぶらさせて大声を挙げる。火の上にかざされると悲鳴を挙げた。炎がまた水滴で音を立てる。「遊んでないで、

早く洗ってやって」と母親が叱った。

エレンはよく実家を訪ねた。実家は四マイルほど離れた村にある。後ろに囲い地のある二組の農家の一つだった。囲い地に鶯鳥や雌鶏を飼い、遠くの小屋に豚を飼っていた。エレンは子供にいちばんいい服を着せて、おめかしをさせて連れて行った。髪の毛は分けてきれいに櫛をいれ、顔もこすってきれいにした。バスの中ではおとなしく隣りに坐って、野原をみつめていた。母親が父親を叱るのを見る時のような、ちよっと戸惑った表情をしていた。何となく落着かない顔である。それでいて、おかしなことに、母と父の喧嘩は自分とはまったく無関係だと言わんばかりの様子だった。

エレンの母親は小柄な女だった。七人の子供を産んだが、ふたり死んだ。かなり前から家事は子供たちにまかせている。子供たちの誰かが毎日のようにやってきて家事をした。アンドルーを連れて訪ねて行くエレンも、エブロンを着け、袖をまくり上げて、床を洗ったり窓をきれいにしたり、洗濯や食事の仕度をしてやらなければならぬ。父親は背の高い無口な男で、だいぶ前から職を失い、雑草の生えた裏の高い地を頼りに細々と暮らしていた。エレンが訪ねると、父は仕事をしに家を出て行ってしまふ。エレンは、そんなつもりで訪ねたのではないのに、母の顔を見ると決って喧嘩になったからである。喧嘩の種は、娘がサヴィル

と結婚したことである。エレンは末っ子だったから、少なくともあと数年は、娘の勤めだけでなく女中の仕事もさせられるはずだったのに、結婚して、その上アンドルーが生れたために、母の期待は裏切られてしまった。

子供は真白な服を着て、言い争うふたりの女の間に坐っていた。純真そのものの青い眼をして、男らしい顔と髪の毛を輝かせている。ふたりのおとなが見せる敵意に漠然と気が付いているらしい。家で父親と母親が見せる敵意も、その根深い憎悪において、似た性質のものであった。丸顔で頬が赭く眼の黒い祖母をこうして訪ねてくることになる前には、それが原因ではなくても、いつも父と母の喧嘩があった。実家の裏庭で埃にまみれて遊んでいると、母は決して眼を離さなかった。裏の囲い地に連れて行ってもらう時には、お祖父さんの手を離してはいけなときつく言いつけられた。年寄のほらも、アンドルーに負けないくらい一生懸命手をつかんでいた。大きな鳶色の眼をした老人はひどく内気で、声もほとんど聞きたれなかった。豚小屋に連れて行って、「そら、ジャッキーはどうだい？」と言う。木の柵のために子供には見えないと、柵の上まで抱いて上げてやった。豚小屋の泥んこが、年寄にも子供にも面白いらしかった。薄桃色の豚が泥まみれになっているのを、いつまでも見ているので、エレンが家から、「パパ、もう連れて帰ってきて」と声をかけるのだった。

「糞が人間に有害だなんて話はきかない」と老人は、仕方

なく帰ってきて言った。

「そうかしら、きれいに洗ってやるのはパパじゃないですもん」とエレンは、家にいる時と同じきつい調子で言った。

「七人もきれいに洗ってやったのはわしだけ。おまえもそのひとりさ」

「誰をきれいに洗ったんだって？」と小柄な老妻が言った。夫は口をきかずにそっぽを向いた。女たちにがみがみ言われるのは御免だったし、言い争う気はなかった。

アンドルーは実家の訪問を愉しんでいた。他所に出かけられるのが嬉しかったからだ。母親と出かけるのは、父親と公園まで遠出するのと同じくらい愉しかった。公園は村を見下ろす斜面にあった。もっと遠い野原まで、二マイルほど先の、川が遠い町からうねうねと流れてきているところまで行くこともあった。

実家を訪ねた帰りには、よく母親は膝の上に乗せてくれた。おかげで、顔がバスの窓の高さになり、母の腕の間から外の野原を見ることができた。行きのバスでは、こういうことはしてくれない。エレンは、行手に待ちかまえている試練のことを考えていたからだろう。「ほら、あそこに馬がいる」というふうに、帰りのバスでは、外を指さしながら話しかけてくれる。自分の家に帰る安心感が心を軽くしているかのようにだった。エレンは実家で勝利を収めてきたような気分だった。実家の空気の中で窒息しなかったと

いうことは、それだけでじゅうぶんエレンには満足できる勝利だった。こういうバスの中の時間こそ、親子が一緒に経験したいちばん深味のある時間だった。まるで子供はトロフィーでも重荷でもあり、母親は優勝者でも受難者でもあるかのようだった。

2

アンドルーが三歳の年に、サヴィル一家はまた引越をした。家賃の安い坑夫住宅の一つに越したのだ。ところが、初めて入った家は古家だった。いくら手入れしても、冬には屋根が雨漏りし、壁に大きな染みをつくった。サヴィルがその古家を出た後、長屋の他の四人の住人も、みんな引越して、その一郭は取壊しになった。石は荷馬車で運ばれ、木材は燃やされた。その後、坑夫住宅街は拡張されて、新しい地所にもつくられた。

引越して間もなく、アンドルーの家出騒ぎがあった。サヴィルが仕事から帰ってくると、妻が玄関で待っていた。自転車を探しに行くサヴィルに、妻はついてきた。真蒼な顔をして、口もきけなくなっていた。街角に妻を待たせて、サヴィルは裏庭や野原や路地を探してまわった。あきらめて家へ帰ろうとした時に、近所の人に連れられた子供が見つかった。隣り村に向って一心に歩いているところを、遠い村はずれで見つけられたのだった。子供は落着きをはらっていた。家の煖炉のわきに、エレンは子供と一緒に坐りこんでしまった。子供には家出したという意識さえないみたいだった。

見つけた時に叱らなかつたからか、子供はまた家出をした。今度は、隣りに住む坑夫のショーが、炭坑で見つけて

連れて帰ってきてくれた。ショーは子供を抱いてきた。子供は真剣そのものの蒼白い顔をしていた。抱かれているのも意識しないふうで、じつと前をみつめていた。

「いったい、どこにいたんだい？」とサヴィルはショーに訊いた。

「機関室のボイラーのわきにうずくまっていたんだそう。どうやって入りこんだのか分らない。機関士が偶然見つけたらしい」

三度目は、村から出る道で商人が見つけてくれた。

「どこへ行くつもりだったんだ？」とサヴィルは子供に訊いた。

「分らない」

「家にいるのがいやなのか？」

「いや」

「こわいとは思わないのか？」

「思わない、と首を振った。」

「悪いことなんだということを分らせるために、ひっぱたくことにするぞ」

アンドルーは家出をしなくなった。しかし、一年とたたぬうちに、またうろつき始めた。連れられて帰ってくる時の子供の顔は、きょとんととして、大きな眼が青く輝いていた。子供をひっぱたくと、サヴィルは外の便所に行つて、便器に坐つた。煙草を持つ手が、結婚して初めて妻と喧嘩した時のように顫えていた。

妻もあきらめていた。今では、家出が儀式のようになっていた。わざとのようにいとも静かに始まるので、家出をされても、サヴィルは驚きも不安も感じなくなった。自分が炭坑に降りて行く時と同じように、子供が危険を感じていないのが、父親にも分つた。無頓着なのだった。サヴィルは、のらくら寝そべっていることが多くなった。犬を飼つた。村の南にある廃坑に連れて行くと、黒と白の斑まだらの小犬は、雑草の生い茂ったボタ山の間を、兎を追いかけて、兎の穴を掘つたりして駆けまわっていた。

アンドルーは学校に通い始めた。学校でも、家庭でと同じように問題を起した。ある日、サヴィルが散歩から帰つてくると、子供が道で遊んでいた。母親にやかましく言われるせいか、行儀はよいほうだった。ほとんど無意識のちよつとした動作から、問題を起してしまうのだった。学校では、机をひっくり返したり窓ガラスを割つたりということになった。家だと、家出することになった。

子供は道の真中で石を蹴っていた。サヴィルの見えている前で石が飛び、別の子の顔をかすめた。その子はしゃがんで泣き始めた。アンドルーの顔に驚きの表情が浮び、身体をこわばらせた。何か悪いことをしたところを見つかると、きまつてアンドルーは自分で自分をどうしてよいかわらなくなるのだった。サヴィルが近寄つて行くと、アンドルーは顔を両手で覆つて、泣きながら駆けだした。道の真中で立ち停ると、悲しそうな顔をしてしばらく父親を見て

いた。やがて、顔を真緒にして、ぎごちない仕種で歩道に上り、同じぎごちない足取りで家の方へ歩きだした。

その時サヴィルは、声をかけようとしてやめた。なぜやめたのか不思議だった。そのことが、子供の悲しみと同じように気になった。父も子も、おかしい後悔の念に取り憑かれていた。子供はとつと先を歩いて行く。父は叱りとばすことができずに、後から歩いて行つた。家に着いてみると、子供は裏庭でひとり足下の土を掘って遊んでいた。泣いたばかりのように、顔を緒くしていた。

ある朝、サヴィルが仕事から帰つてくると、子供は病気で寝ていた。

妻は妊娠三カ月だった。その夜、サヴィルは仕事を休んでふたりの面倒を見た。翌朝、妻は元氣になっていた。アンドルーのほうは熱があつてぼんやりしており、しきりに空咳をしていた。

「心配するな。じきによくなる」とサヴィルは妻に言った。子供に薬を吞ませて、午後を眠って過した。夕方から仕事に行くつもりだった。

起きてみると、子供の容態は悪くなつていた。

「心配するな」とサヴィルは言った。「よくなるまいようだったら、医者を呼んでくるから」アンドルーに今度は解熱剤を吞ませた。毛布を一枚余計に掛けてやった。「ひとりで大丈夫だろう？」と妻に訊いた。

「分らないわ」と答えて首を振つた。妻も気分が悪いの

か、蒼白い顔をしていた。何が起るのか不安で、眼ばかり大きく開いて家の中を歩きまわっている。

「今夜は休めない。払わなきゃならんやつがあるしな」

「大丈夫よ。行つてらっしゃい。いつでもショーさんの家に頼めるから」

「やつぱり、やめところ」ときつぱり言つた。「一家の安全が第一だ」

サヴィルは出かけなかった。その夜、子供の様子がおかしくなつた。大きな声で泣きだしたかと思うと、息がせわしくなり、身体をそらせて必死にもがきだした。

サヴィルは医者を呼びに自転車で行つた。村の医者は留守だった。開業予定の若い医者の住所を教えてくれた。その医者はサヴィルよりも若く、自動車を持っていなかった。自転車と一緒にきてくれた。

エレンは、台所の火のわきに坐つて待つていた。

「具合はどうだった？」とサヴィルは、妻が起きているのにびつくりして言つた。

「あのままよ」と妻は、眼ばかりぎよろぎよろさせて答えた。顔色は前より悪くなつてゐる。

ミルクが火にかけてある。

「どこですか？」と医者が訊ねた。

灯りを点け、医者二階に案内した。

医者はしゃがむような恰好で、しばらくアンドルーの胸を診察していた。

「眼を離してからどのくらいになりますか？」と医者は妻に訊いた。

「十五分足らずでしようか」

「もう手の低どころしよがありません」と医者は言った。

もう一度、サヴィル夫婦の顔をみつめて言った。「手遅れだったようです。お気の毒です」

「なんだって？ この子はどうしたんです？」

「お気の毒です。もう事切れているようです」

まだサヴィルには、医者の言うことが信じられなかった。歩み寄って子供を見下ろした。寝巻が腿の上までまくれている。顔は枕に沈み、眼を薄く開けている。

「お気の毒です」と医者は繰返した。

「死んだはずはない」

「失礼します」と医者は言った。

「いや、死んだはずはない」とサヴィルは言った。妻はうつけたように身を引いた。虚ろな眼をしている。「死んだはずはない」薄眼を開けた子供の影をみつめていた。「失礼します」と医者はもう一度言って、妻の腕を取った。

階下の玄関で、「診療料も、往診料もけっこうです」と言って、サドルの後ろの荷台に鞆をくくりつけた。

子供の埋葬がすんだ数日後、妻は実家へ帰った。サヴィルは自炊し、掃除をして、自転車で行った。一週間

して妻は戻ってきたが、何も言わなかった。サヴィルは家事を手伝って、少し遅く仕事に出かけた。自転車を飛ばして少し早く帰宅し、料理や掃除や洗濯を手伝った。妻は毎朝のように吐気を催すというとはなくなっていたが、妊娠によつて身体を弱らせていた。夕方サヴィルが出かける時、妻は疲れ切つて燠炉のわきに寝そべっている。黒い眼は生気を失つてきよんとしていた。ショールのおかみさんに世話を頼んだ。「心配しなさんな。そばにいてあげるから」と言つてくれた。ショールのおかみさんは朝食をつくってくれることもあった。「じきにまた元気になるから」とはげましてくれた。

サヴィルの生活もおかしくなっていた。彼はアンドールの玩具を片付けた。アンドールと一緒にしたことを思い出させるものは、見るのが辛かったからである。庭には雑草がはびこった。子供が掘つた穴は埋めた。ときどき散歩に行くことはあつても、遠くへは行かなかつた。ある時、仕事の最中に居眠りをして、監督に起されてしまった。

サヴィルは仕事をやめようかと思つた。恥ずかしくて、消えいりたいほどだった。情けなかつた。妻に話してみたら、妻は悲しみに取り憑かれていた。悲しみに閉じこもつていて、打明けることさえしないのだから、どうしようもない。サヴィルが朝帰つてきて寝るベッドの枕は、妻の涙で湿っていた。午後になって起きてみると、妻はうつけたようにただ家の中をうろろしている。手に雑巾や箒を持